

副理事長就任のご挨拶

(財) 日本塗料検査協会 副理事長
神東塗料株式会社 社長
堀邊 治信

昨年5月、日本塗料検査協会の副理事長という大役を仰せつかりました。増子理事長を補佐し、権威ある日塗検の発展に微力ながら尽力する所存ですので、ご関係の各位のご協力をお願いいたします。

最近新聞等で知らされる事故について考えてみると、「安全」という問題の大切さと難しさを感じざるを得ません。安全の思想について「アメリカでは人間はミスを犯すということを前提にシステムを設計するが、日本では人間を信頼する土壌がある」という指摘があります。

医療機関における患者取り違え事件について、取り違え防止のために病院で患者の足首にネーム・カードをつけることにすると「患者を動物や荷物みたいに扱うのはいかなものか。主治医がきちんと患者と接触しておれば取り違えなどおきない」という意見が出てきます。人間性は尊重しなければならないが、事故は絶対に無くさなければならないという問題かと思いません。

東海村での臨界事故は、放射性物質を扱っている工場であるという認識が従業員・会社に全く欠如していたという驚くべき事実起因していると考えられます。おそらく当初は、当事者関係者にそれなりの安全意識があったのではないかと推測されるが、事故がおこった時点では結果として大変残念な事態になってしまった点は、他山の石とすべきだと思う。「安全」としての脅威は人間そのものであると言われる所以でありましょう。

人間は素晴らしい数多くの能力をもっているということは言うまでもないが、しかし一面で弱さをも持ちあわせているということも事実であろう。こうした意味での人間の弱さのうち、時間の経過に負けがちな我々人間の通弊を表現したものとして「喉元過ぎれば熱さを忘れる」「三日坊主」「人の噂も75日」という言葉があります。その事にいつまでもこだわって新しい発展が期待できないということもありましょうが「初心忘るべからず」ということは大切だと思います。しかしながら難しい問題かと思いません。

人間は生来怠け者であるという前提に立つ「性悪説」は人間観を誤っており不適切であるが、一方で環境さえ整えば目的のためにきちんと働くものだという「性善説」がパーフェクトであるという程現実には単純なものではないと思います。人間はいろいろな弱点を持ちあわせているという現実を考えると、こうした弱点を的確に認識し、互いにそれをカバーし補完し合える手だてを講じる必要があると思います。その意味で「性善説」をベースにした「性弱説」とでも言うべき考え方が、我々人間の現実にあふさわしい思想ではないかと思えます。とりわけ安全管理の問題には「性善説」では不十分と言えましょう。

企業なり組織の仕事には、2種類の業務があると思えます。一つは日進月歩の技術革新に見られるように情報化・グローバル化のなかで、組織内のすべての技術・業務・マネージメントについて高度な専門知識・鋭い感受性・豊富なアイデアで日々革新をめざしていく業務です。変化の時代の今、求められている課題です。今一つは、定められた手順で定められた基準に基づき一定の手法で、繰り返し処理し、しかもいささかもミスが許されないといった類の業務である。これらの業務は地味で目立たないがその組織を支え、お米のような機能を果たしていることが多い。一見単純な作業のように見えるがマンネリに陥りやすく、高い精度で繰り返し継続することは、我々人間の弱点からして容易でなく、前者の業務と異なった工夫と努力を要する業務といえます。性弱説に立脚した対応が求められるところです。日塗検の業務にも、この2種類の業務があります。これらの異質の業務をそれぞれの特性をふまえて着実に処理し、実績をさらに積み重ね、日塗検の存在意義を高め、ひいては塗料業界の発展に貢献していかなければならない組織だと思えます。

当協会への一層のご支援をお願いいたします。

